



分六寸三	コ	ヨ	紙	表
分一寸五	テ	ク		
寸三	コ	ヨ	粹	文
分四寸四	テ	ク	本	

序

二上りのいた

こに目。手鍋

さげふと口に

はいへど。實

は乗たや。玉

の興とは。豈

酌女の言な

らんや。其手

鍋提るが。ふ

せ玉の興にも

勝る心意氣を。

序

二よりけいさふ曰手鍋さふと

はふハくても實ハ熱や玉乃

興ハ豈酌女ハ言ならんや

其手鍋提るがゆ玉の熱う山

勝る心意氣をさふとさふ

すつばりかひ

たる作意の妙さくい みやう

かながわこよくら
河奈川の豊倉

を見通す。什みごと

麼生。達磨も

古石に三年

子曰。君子

も中島町の小

徑によらん。

嗚呼三河樓の

料理番が甘

口も。おつや
大津樓

作意の妙河奈川の豊倉

見通す。什麼生達磨も古石

三年子曰君子も中島町

小徑平よらん嗚呼三河樓の

料理番の甘口も大津樓

の口も鹹味する者け本

みづ しほはゆき
の水の 鹹

あじは
もの 味ふる 者の

このほんくち
此本に口をか

けよと。序の

いつてうほこし
一丁 點す 吏

しかり
爾

くはんどうべい
關 東 米

しらす
誌

(印)

口をひくと序の二丁終す

吏爾

關東米誌



自序

色好ざらんは
 といへる。日
 本の放蕩家。
 傾國とそまな
 かす。漢土の
 狂費家の貴妃
 が淫婦。無
 塩女が醜女。
 薄情愚意心
 實も。悉皆皮
 一枚の戯
 ならずや。蓋
 義理一通の通

自序

色好ざらんは。日本に放蕩家。
 傾國と持ちあはる。漢土の狂費家。
 貴妃が淫婦。無塩女が醜女。薄情
 愚意に實も。悉皆皮一枚の戯
 ならずや。蓋義理一通の通

つきけつくころ
情は結句心
のもめる種。
割て見せたり
女郎の腸はた
存込 姿の
江戸ッ子の根
生骨を。酔道
の眞水に晒し
て。一寸南
簾一篇の書
を著し。金の
鯨簡版
打たる。諸君
子の覽に呈す。

情を結句にせしめある種割く
見せたり。女郎の腸を込の江戸
子根生骨を酔道の眞水に晒し
て。一寸南簾一篇の書を著し。
金の鯨簡版打たる。諸君子に覽
呈す。元来戲詭の書と雖也。

もとよりきしよ
元來戲謔の書

と雖聊悟

道の捷徑なら

ん。ハテ足下

にんげんいつせうろ

人間一生盧

生が夢。樂し

み僅二十年

ナソレおちか

ひ内と云爾。

于時戊午春初

仕舞翌日

於三河樓

見通

式亭三馬

採筆

啓子の捷徑おんハテ足下人間

一生魯生が夢樂し僅二十年

ナソレおちかのひ内と云爾。

于時戊午春初仕舞翌日

於三河樓見通式亭三馬採筆



凡例述意

○先に雷名の諸先生
 サキライメイシヨセンセイ
 トウギ ナンビンホクワク
 東妓。南品。北廓。
 セイヤウユウリ セウセツ
 西娼の遊里。小説を
 チョジユツ コツケイマフン
 著述し。滑稽妙文
 アメカイタイフル ソノ
 普く海内に震ふ。其
 アナウガ タカ カウ
 穴を穿つ莫高は高
 マン ハナコクムテンイタ
 慢の鼻虚空无天に至
 ヒク カウジマチイ
 り。低くは糞町の井
 ド アサシ コンテイ
 戸を浅として。混底
 ナラクエンラ アタマ
 那落閻羅王の天窓に
 トック タンサイ
 届。於て之知才の
 セウシラ ショ
 小子等。書せんとす
 ヒツトウブン
 る筆頭の文およば
 ヨツイマシヨクシ
 ず。依て今諸君子の
 ヒゲン カヘリミズメイカ
 非言を不顧。名家の糟粕を嘗て。予が分に應じたる新市場の世界を著す。文くたくしく符合せざるは。覽者の

凡例述意

○先母雷名乃諸先生東妓南品北廓西娼の遊里

穴を穿つ莫高は高慢の鼻虚空无天に至り。低くは糞町の井戸を浅として。混底那落閻羅王の天窓に届。於て之知才の小子等。書せんとする筆頭の文およばず。依て今諸君子の非言を不顧。名家の糟粕を嘗て。予が分に應じたる新市場の世界を著す。文くたくしく符合せざるは。覽者の

應じたる新市場の世界を著す。文くたくしく符合せざるは。覽者の





ツケコハイロコイネガノ
増校言を希ふ而已。

○此書の趣。女郎一人

サンカクイミ ウガ
に三客の意味を穿ち

ウソマコトメイゴシメ
嘘と實の迷悟を示す。

シカリイヘドモドブシツウ
然と雖。東曲通の

ランテイ
覽に呈すとは非ず。

クハツツウメ ミゲハイ
廓通の目より見れば外

フイデキ ゴト
國夷狄の如くなれば。

ゲンギヨ おす カハツ
言語もおす に變て。

ミ、ダアソノヒリ
はんなど耳立は其鄙俚

アラタメ ないしわたい
を改す。○舟宿衆。私

タゲ タグ ソノ、イダ
等の類ひ。其儘に出

して。片言の誤を
正さず。唯有容にな

サンタラウブンチアタ
して三太郎權七に與ふる而已

さるハ覽者乃増校言を希ふ而已

○此書乃樹女郎一人ヲ三客ノ意味を穿ち嘘と實

乃迷悟を示す然と雖東曲通乃覽母呈すと云ハル

廓通の目より見れば外國夷狄の如くなれば言語とお

小変と云ふと耳立は其鄙俚を改す舟宿衆私

等の類ひ其儘に出して片言の誤を正さず唯

有容なりと三太郎權七に與ふる而已

日上 囉哩樓主人戲著

已上

タ
囉哩樓主人 戲著

發語

戀別の後朝。ハイお迎ひに別の鐘。間夫と女郎に惡まるゝ鳥が啼吾妻なる。辰巳の里に舟はあれど。君をおもへば歩行よりぞ。行も歸りも心から。仰の目先にちらつく。ぶら提灯の火と共に。おさき眞闇行當はつたりと。お座鋪子供衆の斷に。一身のねぐらに迷ふも。おのがさま。氣風にや有りなん。爰に一場の娼家あり。所謂戸橋赤町櫓橋。おのゝ列國を分ツが中にも。古石新石の繁昌。此里惣別客品有り。平代橋と共に長し夜を。一ト切遊びのいと短きに。遊子純通。サツサ押せの猪牙舟に乗じて。闇雲たる有頂天へ昇り詰。終には違ねへのまん中を取はづし。トツチりとんと身を落せば。食客の權八さんとなる。是則水道の酩は。身を喰ふ喻のどく。夕に千金の角

座鋪。朝に男山の重着するも。通と不通の譯合ならず。兎角世界は竹田近江が積細工のぞし。爰に群來る遊人は。中通い下の人物にて。棧留青梅の店者は。屋鋪通ひの初馴染より。年に二ツの出番を誓ふは。聊二星の契りにや比すべき。彼放蕩家の吳王。姑蘇臺に西施をして。チヨンく幕の樂も。かくやあらじと未至通の貧君子。價安きをもて喜見城の思ひをなし。適兩三個の妓藝を揚げば。晋の謝安が東山に新狂言も是にはしかじと。やに下りに高ぶり。自ら錢湯の湯氣に上つて。黃色な潮來に湯番を恐させるの徒。潮來を以て。克己ハヨウトウを度し。新手を以てよくスツツパリを殺す。此世界の風土といへるは。長髪羽織の細身指。黒縮首のばつち尻はしよりといへる。きん／＼姿の青樓風を廢し。或は酒の手拭を肩にかけ。花色繻子の帶。貝の口

に結び。或は前垂腰にまとふ。丸額の大銀杏。客人か。將船頭か。船頭とも見へ。また客ともみへ。大きに賓主の禮を亂して。二上りの騷唄。夕しげんの程もなふ。又ぞや内の御首尾の程と。ぬのさき目の口紅粉は。萬客膏と名められて。行客の詠めは絶すして。しかも元の客にあらず。流に浮ぶ川竹の。且切れ。且睦びてと長明が。方丈の文にはあらねど。賃や賑ふ繁花の地。爰も名にあふ鎌倉の。大磯小磯化粧阪。わけて名高き手越の宿。戀の船着。情の渡。新地の端に漕寄る。一般の棚なし小船。新市場の橋の下。洲へ當らじとする處へ。はるか古市場の方より來る。贈り舟の潮來洒落。たがひに摺れ合ふ舟と船。客と客とが見合す顔。胸にぎづくり。ばつたり落すら燈灯。へ今のは慥に。胸と胸。へふそれよ。折柄時も四ツ明の搦手木

船は別ふたはなてチリチツツテレ
みき已聞ゆる。
 跡あと白波しろなみに音おと而

四よツ明あきの部

品目

いそろろかき殿

いそろろうき殿

いそろろき殿

附り あくろん遊む三人一座の殿

女中印 客三人の智恵ちえ競

石坂屋已婦言

式亭主人著

半夜 鐘 ボラン。 夜番 拍子木 カチリ

につれて。バタ／＼ト／＼たる料理番の
組板も。良音なくして。棧橋の声何屋
／＼アイ、引の返詞。階子ばた／＼も
盡て。船頭の魂廊下に納て勤番部
屋の刀掛のどく。お客だよの美音。
忽ちに鼾眠と變て柿餅のどし。傍に熟
柿臭き船頭の柑餅あれば。恰も菓盤硯
蓋に等しく。臺所に算を亂し。鼠天井
に踊て料理場を馬場と競ひ。遠く望は
波風見通に寒く。高調子の乙唱哥も風
輪蕎麥の音に淋敷。寐言の掛合を視
合て。舟宿の兄さん色支の廻部屋へ這
ひ込。不寐番のお針麻苧桶を片寄せ。
醴を温て呑む時分。遙に米相場の迷
ひ子。火の用心さつしやいませうの鐵

棒に響て。爰に聞ゆるは。へたしか

鎌倉古市場二川屋の二階と見へて。
客と娼妓の差向ひ。寂莫として手管
の意説

客人 藤兵衛 見へて。年は三十五六すこしさびの有

でつぶりとした人物。衣裳付。藍おなんどの羽織
をたいて。まくら元へ置同仕立の上着をぬひ
て夜着の上へはうりあげ。中著もつむぎの鼠返しに
うきす小もんまがひ八丈のがく小袖の下着。一丁な
がら黒のはんまり。らせん絞のちりめん半袖。桶井
におなんど七子の帯ぐる／＼と前て結び。越川仕入
たか細りのたばこ入。尤中へは角角仕出しのちり
めん細引を入。こしらへは惣白鐵さびそぎつぎの
銀さきで。うす舞をくゆる。

女郎おとま 笑の内の板もと也。但し子共やにより
しよくといふもの。しかし是はいはずと御ざんして
らんが念の爲已上。一中どし。せいにすらりとな
く。少りきみのある姿。あいうへだの三すじ立のこり
くするやつ。下着はしまちりめんのせいらつ。桶

伴はひぢりめん白ねりのはんまり。尤ゑりは
ひろく。鼠の二重どんすの帯をしめて。あんどろの
そばにすはり。片手ついて。片手はまへがみのぶ
らさがるを。ほうしんかんざしでさしこんでゐる。
藤兵衛 コウわけをいくな。何もふさぎの
すじやアねへ。なんのこつた。庖丁を
引ッたくられたちんこ切か。すみ繪の
虎じやアあんめへし。口上書を出して
藏前へすはつてゐやな。ア、おもしろ
くもねへ。おとま おめへも又あんまりで
ごせへす。かばちや畑へ風をおつこと
したやうに。おつにからんだ事をいひ
なへへす。ソウ又穴の穴までほつて聞
たくは。わけを話してきかせやせふ。
藤兵衛 したとよ。穴を堀るのほらねエの
と。水場の施主か。堀抜井戸の地主か。
聞てあきならア。ふさ／＼しひ。と何
がふさ／＼しひか。譯も聞ねエで腹を
立なはるが。ねッから氣がしねねへ。
藤兵衛 よしてくれ。くそ落付にあやなしか
けるな。面白くもねへ。こういつちや
アごてへそやうな噺だ。てしやべりださふ

化されぬ。そりやアねエおちやつび
いだ。富澤町の朝市から。ぼろ壹匁五
百に買て天道干へぶらさげる様な。古
革羽織でも。こう又おれが天眼鏡で。
待エ、と一番怪られては。何がなんと
いふ場もなく。成程こういふ利屈
の狂言でござへすと。嵐が立をする様
に。平つたくあらわせろ。御勿鉢ねエ
こつたが。おいらやりてが目たく玉
と嫌ばうアの胸ツ尿を根付にして。視
眼嗅鼻を緒に付ケ。化の皮を引ッば
ひで。提たばこ入に拵て。浮世をぐつ
と薄色に吞こんでいるせうがには。何
はどぶだ。角はかふだ。附木板のへぎ
残りばち。や。ちんころの舞臺になる。
拂扇筥が喜蒲刀に化るの。料理場の
鮑ッ貝は。やたひ店の出来合卓朴。し
かも料理番のはまちなると。こいら
アちよつくり。むくおきのうがちだ。
ナント世界はあかるひもんだらふ。サア

どぶだ返詞をしやな。只うつむひて何
にもいわずのお半きどりも。モウうるせ
エ。そんなしうちは切落へ落るとも。
棧敷連のジャハはこねへ。よししてくれ。
そつくりと犬のくそのねへ處へ置にし
ろ。たとへ左交と五瓶が近松已來の新
手をかいて。千手觀音が化身して働か
ふが。びくともくふ男じやアねへぞ。な
んのこつた。あきれが中返りをして。葺
屋町川岸へ輕わざを出さア。ばか／＼
しひ。
とぎれて。ほんのこつたアエ、つがもねへ。面白く
もねへ。などいばこそ存ながら。小番であくたい
のねじめをして居る。おとまは先刻よりちよびり
くとおつくなるやふな水を向ケ。段／＼と圖にの
らせる工面にて。なんともいわず。あんだうのぶゆ
をかんざしで追かけたなり。ん／＼ぐさのかげぼろ
しを勘定したり。むだ書のいたこ節をなとりちらし
て居たりしが。さてこそこなたんの時刻到來とそ
ろ／＼ころし文句ヲ考へ芝居の魂すい紙で張た月
といふもんで。上たりさげたり井戸がへものつるべ
ときめか
〔と〕成程おめへのい／＼なはるとを聞や

しちやア。一／＼御尤さ。けれど又わた
いがいふわけをもちつとは聞分てくん
なせへし。そりやアおめへあんまりお
情ねエといふもんでござへす。わけも
聞かすに腹を立なはるから。〔蘆〕おきや
アがれ。いたこそじかに焼なをすな。
譯もへちまもモウきかねエ。〔ハ〕ハテそん
なにしからず聞なせへし。なんぼし
がねへわたいらが様なもんだつて。相
應に蟲といふ物は持て居やす。ヨシカエ。
今おめへのい／＼なはる。喜之さんとい
ふ客人は。めど橋の大きくやの源さん
が連れて來て。初の時からしてちつとわ
けのあるこつて。船宿衆とも断合に。い
つそ義理だらけで馴染になりやした。
それだつておめへとは是程の中だから。
何も外の客人へは。是程も實を盡した
とはござへせん。マアそりやアうつち
やつて置て。此初仕舞をたのむにも。
知つていなはる通り手も足もねへ身分

だから。客人はさつぱりなし。誰とい
つて相談してくれるお方もねエ。とい
つておめへに。■なんだ。おれに相談
しかけても。所詮できねへと。見くび
つてしたやうくりか。ほんのこつたが。
古市から新石切て。者が幾人。子供が
何人。その内よび出し。是／＼がふせ
玉。出居衆がどれ／＼。あすこの内の
娘分や。爰のお針は扱おひて。どこの
内じやア火入炭團がいくついる。蠟燭
油はどれ程つかふと。しがく所の穴の
穴までしつてゐる。朝は大島町のむき
み買の出端を切ツかけ。日が暮れば白
魚の筒と一所に一年三百六十日。内に
ねる夜を遊びと心得。夜着の半ありの
天鷲絨すれに首筋をいため。尻の先へ
猪牙舟だこのいつた男だ。是程につき
合ッても心いきは吞込ねへか。こんな
に安く見られちやア。猶此腹がおすわ
んなさらねへ。
トちつとすれば腹をたつて。
太平をならべる。一鉢此男は

酒によふといつてもしやべり出し。さめての後は常
のどくなれば。おとまもふだんのと承知して。
さのみおどろきもせず。機にのぞ。へんに燕じ
つ。意味無量のかき文句をあらはす。此あくたい
すなはち女郎の腹よりなせるとにて。大詰となれ
ばついに一ツのおとし穴へ落入る。はなはたおそれ
しきや。■おめへの様にばんいちに熱く
なんなすつちやア。どふもわからねへ。
ぬしの心いきはどふかふといわねエで
も。如在ねへといふこたア。しり切て
居やさア。夫だつて又。こつちの心も
ちつとは掬でくんなせへし。こりやア
わたいが遊れたのかはしらねへが。新
市場の氏田屋とやらに。わかつた子供
衆が有て。おめへを深く呼申スとき、
やした。それを聞ちやア。なんぼはか
ねへ身だつても。ホンニしみ／＼と腹も
立。くやしく思ッても諸事。苦界といふ
もんだから。道柴の露程もおめへを恨
む心はごせへせん。よもやそいふ譯
合じやア。こんな手もねエ女に乘て。嘶
てくんはる心も有めへと思へば。い

つそじれつたく。ナゼこんなしみつたれ
に生れて來たかと。心でわたいを恨ん
でおりやす。■
トなき聲でも。たれか。何かに
ばうぜんとなり。目をむし。
やうにばく／＼しながら。
覺ねへ。また有たにもしろサ。手めへ
はごふぎときれいなとばかりならべ
たてが。ナゼそんな喜之助が名を
腕へはつた。イヤサどいふ譯合でおれ
を出し者にする。モウ／＼是をいやア
胸ッばらしが澤山ある。うでをほると
も。かじるとも。勝手にしろエ。も、
んがアめ。■そりやア。おめへでもね
へい／＼ぶんさ。此はり物のわけもよん
どころねへ義理にからんで肩やした
が。是だつて根をたんでへて見りやア。
みんなおめへにつくす心でごせへすは
な。■ソリヤアなせ。■
トハテ初仕舞を頼
ッても外と違て人も多けりやア。つい
六兩と七兩はいると也。夫に又いつ
かちよつくり咄した。とつさんの病氣

が今にやつぱりむつかしくつて。人參の代々何角八兩程入用だから。年ンをかき入れてなりと工面してくれといつて來やした。ソレもおめへの方へは來年行ふと約束はするし。どふもかふも思案につきて。金故こんな不義理をするも。とつさん。おめへへの働ばかりさ。ホンニわたいがちつとは不便だと思ひなはるなら。腹を立すと堪忍してくんなせへし。ト物思ひに。岩木ならなば。此一言にはなはたのろくなり。藤 おれだつても。すへ始終。屁をひり合ふといふ中だから。腹をたつてもねエが。彫ものゝとはどふもいめへましくつてならねへからいふとよ。一鉢又鳥居町から來るやうが。さつぱりと氣に喰ねへよし。そふ云理屈なら。十兩が十五兩でもたて引にもおれが出す。その代にやア喜之助ヲすつぱりと突出して見せてくれ。壹年早くこつちへとりやア十兩だ

しても氣持がい。ト段々くつにのぼるが五つほへもち込。心。そふいゝなはる程どふも其金はもらはれやせん。其はづよ。金ヲ遣はせねへつらで。やつぱり引込のがいやでもあるし。又喜之が方へのつらもたつめへ。とそりやアおめへ愚痴。ほひ。今も咄た譯合だからどふも心がすみやせん。藤 すまぬ心の内にもしばしだ。何でもすつぱりつき出すといふ證據を見せやな。と證據といふは。マア此彫物をけして仕舞ふ。藤 笑ひま。そりやアどふとも勝手にしろ。しかしそいつを消すには。あせもでもかけずは行めへ。とさついいしやれさ。そふいわれてけしかねるものか。ト兼て用意の枕の引出しより。切支をとり出し。色と欲とに縁切支。あつきは女郎のつらのかわ。切支はあんぐと立のぼるに。おとまは是も金ゆへと。口の内には唱名なら。十兩くととなへながら。すつぱりとすへ。と。ア、あつかつた。サアよく見なせへし。ト前へさ。藤 むいよし。違

ねエの真中だ。夫ですつぱりとわかつたが。ついでにそつちの腕を見せや。と。うてま。しらきてふめんだ。よく改てみなせへ。トはなのさきへつき出す。藤兵衛はとつくと改。枕もとの紙入より。遠州どんすの金子入しを。藤 ソレまあり出して。小判五兩なげ出して。藤 是をとつて置がい。跡は明後日持ッて來よふ。もしまだ用があるらば。舟宿迄いつてよこせ。ソシテ内へも大事にしろと云てやりや。と。なんにもいわず。只いたを。し。て。い。る。ね。モ。シ。ち。つ。と。寐。な。は。ん。ね。へ。か。藤 ム、モウごうてきに夜がふけた。サアねよふ。トよきをまくつてはいる。折角に。大。の。八。丈。に。鐵。炮。し。ば。り。の。じ。ゆ。ば。ん。白。縮。絹。の。し。ご。き。ヲ。だ。ら。り。と。ぶ。ら。さ。げ。け。の。ひ。袋。を。い。れ。た。鼻。紙。を。た。て。に。は。さ。み。前。髪。と。び。ん。ぎ。り。は。額。口。へ。お。ひ。か。り。大。鰯。田。の。が。つ。く。り。返。し。に。奴。が。ら。は。モ。ウ。故。い。と。か。で。平。ラ。元。結。の。じ。み。に。し。ば。り。の。な。ま。き。の。す。そ。を。ぐ。る。り。と。ま。く。つ。て。兩。手。で。か。へ。し。廊。下。を。つ。ま。だ。て。て。ひ。よ。い。た。いた。こ。し。や。か。や。あ。み。だ。や。お。お。お。は。二。タ。親。の。異。見。で。も。は。れ。た。お。ま。へ。が。ど。う。ま。あ。思。ひ。切。ら。り。よ。か。そ。り。や。む。り。じ。や。あ。ま。お。の。二。上。り。を。角。お。と。ま。さ。ん。あ。け。て。も。よ

しか。[と]おかくさんか。這入ねへな。

[角]隙子を明んとすぞ。が、エ、じれッてへ。

ナゼこんなにあかねエ。いけすふ／＼し

い障子だぞヨウ。トばたアリあヲヤ藤さん。

ナゼだんまりでお出なはるエ。恨でござ

へますよ。ト僕手てひさからさきへばたアリト

すわり。ぶる／＼としてしやが

烟草をついて。あんどろは魚油ゆへ。紙へちり

ひ。あんどろの蓋へはたく。此内藤兵衛はだんまり

のいびきゴ。藤ム、ムウだれだ。角誰だも

すさまじひ。とつびんちやんさ。藤ム、

奴が。角いやだのふ。奴とはなんだへ。

大部屋じやアねヘヨ。藤そんなら大ば

やか。角きついしやれさ。トきせるでた

る。藤夫でも平代岡子よりは。はらぶ

とがい。と。掛取頼んだじやアねへ

か。角ヲやはづかしい。いろんなどを

云なはるねエ。きついお豆だ。うつち

やつて置なはいましヨ。トしたを藤ヲ、

長い舌だ。只今舌の上へ長刀のよふな

客人をのせて。水車のぞく。おしや

べりを出します。コリヤ娘ヨ。アイ、とい

ゝな。氣味の悪い。化され客が。まち

／＼して待つて居るだらう。[と]エ、ウヤ

かましい。 Chatt 相談が有からだまんな

せへし。やかましくつてならねへ。トせ

て。ト方から。藤ア、あやまり／＼。あやまつ

たのかんざらした。モウねるよ／＼。トキ

ニ。お角さん今夜の客人は初か。角イ、エ。

藤裏か。角ムンニエ。藤何のこつた天川や

の伊吾が大薩摩の朝比名と來ている。

ハ、ハ、ハ。[と]隣の部屋は誰だのふ。

三人。タカ、い。角アリアアお百さん

とんだやかましい。角アリアアお百さん

の客人さ。三人一座で。くせとして廊

下席だから。いつそ。いやがつている

ヨ。[と]なんだかおそろしくしやべるの

ふ。ト移戸のすきより三。曰く

人のぞきまに。

後堂貧客三個交席段

中座鋪三人納床にて床納つて。いまだ女郎の來ら

ぬ跡。鋪中の屏風の内に坊主天窓をくびつ切り夜

ぐへつこんで。やに下りにふんざり返り。暖のら

くがきをよんで居るは。醫者の内弟子ト見へる口

ナには張仲景が聲色をつかつて。内證は醫家手引

草。傷寒論國字解などをそらんじ。何ぞもよく差

出たるが性にて。切り抜覺への陳音廣音韻な

どを。しつたかぶりにならべたがるくせあり

へん。達。黒八丈の七ツ時分な羽織に。上着は松葉色

の山まへぶとり。同じく七ツ頃茶返し小紋

のふとりの下着に。花色はかたの帯を

ズ。まだ寐所へすわつたまゝ居る。

吐。運で居る人物。田舎廻りの太夫か。人形遣イ

か。但し茶飯已下の上りても。うなりさふにて。

まきびんの大たぶさなるいてふ。三日頃のあたま

めんちりせいらつじまの羽織は。廻しの女にあづけ

ず。はおさとのしやす。世。大織の丁子茶の上

着をぬひて。すその方へ置。お納戸返し小紋の下着

に。もおかの鳴海しぼりの裾は。不殘黒七子の半

あり。黒八丈の帯ヲて。なんだかつまみ喰をして

いる。こいつに樂方言のセンボをつかくせ

有。

東吉。醫者さまの安眠取次と見へて。黒縮緬の上着。

定てよまかん色なるべし。下着はんだぶつ

り合にて。さんとめの三すちたち少くばらのさ

「戸邊隣屋の兩雅人娼婦未至。是何の謂ぞやだ。嗚呼可嘆。腹中大ひに北山の豊心丹だ。」**巫廻** トキニモシちつと古い白だが「やん」はどふいふもんだの。埒のあかね。」につてんが幽霊になるまでまだ來ねとは。あんまり。ばか／＼しい。**東** たつた今廻しの「おゆき」の聲がしたッけ。呼付けのいざ並べはどふだの。**巫** とゞ大話の「そり出さう」は「かんどう」めくやつだせ。用うさアね。如斯不利時は巴豆を配劑といふ場だ。**巫** 直に手前洒落だ子。**東** モシちつと「孫右衛門」を「孫三」として「せめ」が「孫右衛門」此通りだ。**巫** ム、い／＼／＼きび／＼。雁首ですくつて吞むが居候川柳く。らたばこれをいれを出し。きせうい。は有りか。**東** 有やす。ト「服いめへまし。所詮此がら／＼じやア咄合が解らね。」ト廻し枕を獨りて。破る程煙管をはた。吐コウ片達さん。

ちつとこつちへ來なせへ。片達廻し枕のいたむ故。ふとんの下へ入して。其上へふとんヲのせて枕とし。坊主あたは愛が妙だなど。ひとおきて。こちらの屏風へ來り。ハ、ア此屏風はなんだ。妙画／＼宋紫石。沈南蘋はだしといふ画だ。こいつア圖取にさせる繪だわい。和漢ませこせちくらが沖だ。節分の晩にやアチト恐れるス。トキニせいざを「やつかい」に吃したせいか。スコ「しぶたら」と出てへ。ガ所詮モウ幕は切めへ。ト黃色な声にてあたりをラツト有り／＼こいつアい。奇々妙々絶類な鹽梅だ。ト覗ぶたのわきに引のこして置たる。燗の茶碗物のひやつくくなつたやつを。むしやうとすゝつて。**東** なんだ／＼ちといき山としよふ。沙汰なしは。大キに恨だ。**巫** がうざと「のせ」かけるもんだの。夫じやアかくやつかい」と見るわい。**巫** こつちの畑にやアねへこつたの。そこらはぐつとちソレ俗物とかなんとか別世界にして。諸事色情は離だもんさ。ソリヤアそふと此

妓婦はどふだ。根ツから氣がしれねへ。足下は不佞が婦人を。とくとく熟覽したか。おそろく醜女。彼俗に云しみたれたらふ。**東** デモあいつアざらまんでもねエが。わつちがのは首ツつきが妙だ。吐逆さんおめへ見たか。**巫** 大キにサ。饅細工の鳥が南風をくらつたといふ首だ。**巫** ム、い／＼妙言／＼。コレ此枕を見さつし。ト吐逆が女郎は廻してなきゆへ。ぬり枕の古ひのを出してある。せて。出そふといふやつだ。**巫** ム、い／＼妙言／＼甚哉滑稽の大ひなる。實に當世可惡だ。**東** 愛の比よく紋を見ねエ。すこしきざはりだの。金箔の古へも今斯なつちやア霜枯の藥罐天窓。焼原場所付といふ見へだ。**巫** ム、い／＼妙言／＼。**巫** ドレうさアねへ。へんちきな紋だ。べちやアねエ。どぶ漬きうりの輪切へ。どらやきをくツつけたやふ

だ。園是でもなき殺した狂言だらふ。しかしアノつらで「これだれ」ちやア。掃溜の地震。雪隠へおつこちた雷。といふつらだらふ。何分恐れる。園ム、いゝ／＼妙言／＼。何んでもソレ方便を用ひて。あいつが懸河の辯をふるつちやア。どんなやつでもひたいへ江戸繪圖の川といふ筋を出して。一ばんひねツて見るのサ。恰も堅板へ詰り小便をするがどしだらう。咄大笑ひだ。横板へ泥もあきれらア。園コウ爰の内もめんがまぶな子供はねへせエ。そして出物がいゝなぞといふやつもあるが。おいらにやアさつぱり解せね。疊の酒しみて。茶のしほばやいと。壁の落書を見ちやア。晝遊びのあいそづかしだ。コウいかねエこつたが。此頃の世界をりしまさねへか。是はしらぬ。咄イ、エまだりしやせん。又おめへ「與太郎」じやアねへか。

園チト承りてへチ。園話説する所は五六日以前の事さ。兩三個の社友と。去る學館の歸りから。ぐつと北方へ飛ばせやした。そこでおつりきなどがあるもんだ。わつちが盃をトさしたやつはモシがふてきさ。咄ム、ありがてへ。定てサありが／＼。園聞なせへ。床の内は初會にしては。おそらく妙手。なか／＼九目もおかねへじやアうてやせん。そのくせ國色尤物。イヤモ至ツての佳人さ。咄ム、有がてへ／＼。園大きに來てむしやうと首をふり廻し黄いろなこわいらが段々と高てふしになる。此内東吉は一向てればう風へうつるを見て。おかしけれどもわらひをかくし足をばた／＼。園そこで兩座面につらなる歌妓封問。こいつまた虚誕を交てドントレ二階中が引ッくり返りの大ど／＼。流石の大層高堂土佐の大仕掛を見るがどく。イヤモ愚僕大酩酊。諸事夢のど

くで閨房へ入やした。咄ム、そこでおめへの名句。確論がありやしたらふ。つたかぶりに挨拶はすれども何かさつぱりわからず。さすがだんまりでも居られぬ。咄ム、ありがてへ。妙だ。ム、いゝ／＼トばかりあわせかみてゐる。東吉は勿論先刻より大てればうに。口の内でいたこをうたつ。園その世界もいゝが。今宵はどふだ。モウたいくつの筋だ。咄初會廻しはとらねへ所を。むりにあがつたから。こいつは覺悟のめへだ。園おゝかた女郎やか。あんどんべやへおつかたまつて。出シッこのおでんしら菊。そばイ／＼で。しやれてるだらふ。園但シはなめかたでも初めたらふ。園ア、さむい／＼。マアトちんぼうふり出してへもんだが。コウとてもこふなつちやアナ。彼。ナツレ。咄ム、何か。よし／＼片公「さくら」を出しな。や。咄こりやアおそろだ。そんならこいつから先へ。園シイこりや。三人口をふきて。チ、チンぐわあん。咄此所黒幕忍び三重。咄大

臣柱に松の立木有り。東蛙の啼音寂鳥の

笛「チ、カ、カ、カ」モット「七兵衛」を高くま

くりねへ。併し「ぐる」を取つて眞裸もい

つ。こいつア「はちや」「かめ」たくせが

兎角うせねエ。とは質の也。夫でも此頃

は「ごうま」だから。チト「けまん」をうめ

るつもりだ。がうまトハ工面のよきと

つアふり「どつしん面白し」。トのこら

かになりて。そこらあたりとちらしたるだし物の

引残りを。らうかへ引ずりだし。夜具をたゝんでら

うかのまんなかへつみ上ゲ。その上へ屏風をのせて

障子を外し。東吉がかるわさのまねをふりしてどしどし

やるめら。大さわざ。吐逆は口上の事ハが声色で遺

ひ。皆さんさよと見ておくれな。さきまぐ

〇一舄此里にては。わるじやれ遊の人物多

く。此くらひのとたびくなれば。内所

すり／＼出来り。お定りに女郎をしかりて。

むりむたいねかし付る。そちこちする内。

夜もはや明方にちかづけば。こちらの座鋪

にとり紛れ。いかどなりしや跡はしらず。

「おとま」コウ藤さん／＼。モシ。モウおきな

せへしナ。よく寐なはるのふ。トゆりお

て。目をひらき。藤ム、ア、ア。一ト息に。や

のびをしながら。藤ム、ア、ア。一ト息に。や

つつけた。モウい、時分。トまだトいい

ひつて出。藤ム、ア、ア。一ト息に。や

モウ歸らふ／＼。トマアいゝわな。モツト

しづかにしなせへ。折ふし廊下を廻し。藤誰

だコウ。藤ハハ私。藤さんモウかへ。ま

だおめへさん。お早ふごせへますよ。

藤ウソ早くもねへ。下へ行たら船頭を

おこしてくんね。藤ハハ。トはしこ

へねエ。ト口をおさへていふは此頃のはや

お舟がよろしふござります。ト屏風を

おとまさんベア。引。トしたを。ト何んだ

かねエ。其内藤兵衛もした。サア行ふ／＼。

コレそんなら。タ。の。をわすれめへ

ヨ。吞こんで居やすから。わるくは

しやせん。そしておめへいつ来るはる。

藤コウトあしたはなんだによつて。ヘエ。

トしはらくム。あさつての晩来よ。トを

んなら宵泊を付てまつて居る。ハアヤ

あつかましい。トエ、いらぬ世話だは。

トつめ。ハアイタ、ハ。まだ齒はるねエ。

トまた口を。トエ、よしなといふに。むひて

おめへはんとふかへ。藤やかましい。

どふともしろエ。トはしこばた。若イ者

を。トおさらばエ。藤ハハ。ハ。おちかひ

鳥啼て霜棧橋に白く満。胃の口舌に朝直あれば。首尾を苦にするセツ立あり。醉も不酔も悉皆是。朝河岸を漕ぐ舟の寶聲。バカく馬鹿の至りにして。其傾城の心の内。明の鳥も鶴も。悪や可愛や裏表。

△前席の客心は只おのれ獨吞込すがたに。しりもせぬ穴をさぐり。傾城をかゝアにしこなし。おらア遊びに行ても女郎を遊ばせてやるのだなど。高慢をはきたがる風なり。是等の類ひかくくとして己がかゝれる物なり。よくく此跡幕をこゝろみ給へ。ナントもしおそろしいやつだ。

△後座に述べたる三人一坐は。何となくむだヲなれば。しつたり自慢に氣性高く。唯通人の口まねをして。點点のみ樂しみとなし。寒夜に衣をぬいで延喜帝のしなどゝみざける。是あくる日髪結床のだみそにあるべし。

畫遊の部

喜之助
しつかりとした商人のひとりむすこ。まだ部屋住のとなれば。金の都合はチトわる

けれど。随分小利口に立まはり。餘りやすき遊びヲさひ。いつも稽子の二三組も抱け膝受きいづくし。いやみなしに。むづりとした風に。女郎の持てくる客也。けふは寺参りとこつけ。今床の廻つ。衣裳付。上田の小袖にりうもの合簾。黒た鉢。手八丈の下袴。赤紫緋縹黒いこの半ズ。りのかいつた襷ばん。花色の唐ごくの帯を。ちやんと猫じやらしに結び。金糸文彫りの鼻紙袋。きのみ襖大キからず。たつた今小便所から見通しへ上り。綯舟を詠ながらなじみのげいしと出合。ニツ三ツすてぜりふ有て。廊下ヲとんくとはこばせて。ふとんの上へふわ。書どうが雪でもふりさふな景色だの。トいながら上田の羽織ヲぬいで。船宿

のむ。棧留關東絨の袖入。花色襷子の帯にリツす。こけにさらしの手拭を腰にはさみ。紅革いば槍びの惣草入。角つなきの金物ヲうつたるをさげ。天窓はすがけのさきを左まきにちらし。兄さいつと喜之助と合口とて。けふ此里のならひなり。りをたみながら。勝。モンこりやア女郎でござへやすね。書ム。宗理に書て貰つたから。華溪に澤庵の賛をたのんだ。圖どふぞお讀なすつてお聞せなせ。書ム。こうさ佛は法を賣。祖師は佛を賣。末世の僧は祖師を賣る。汝は五尺のから

だを賣て一切衆生の煩惱を安んず。柳は緑花は紅ひの色く。哥にへ水の面によな。月は通へども心も留す蔭ものこさず。ナント妙だらふ。おらアよつ程よく出来たと思ふ。すこし考。こいつア面白ひ。ム、なる程達へこせへやせん。是はどふか。道理先生とやらの。い、さふなせりふでこせへす。モンさつき摩利文天河岸のこつちらで。物ヲおつし

やつたのは。わつちもどふか見申したやふで。書ム。ありやア友達だが。頃小橋へつき合たともあるが。此頃は河岸をかへて町へ行そふだ。あんまりさへねエやつさ。廻しの女來りて。お定りどす。船頭も綱打場とはづして。跡は喜之助一人り。火鉢ヲかゝ。灰の中へ五言絶句を火箸で書きちらし居たりしが。かたへに在ん枕の引だしの明かりてありければ。引出し見るに玉帳あり。ひるげて見ふとする處へ。おとまはやうにヲつかひながら來り。此鉢ヲ見て。おとまは喜之助さんんでこせへす。めつたに見るもんじやアね。アレマアこつちへお

よこし。[註]いゝわな。見せねへ。ナンダごうぎにいそがしひの。是じやア病氣ヲ付るも尤だ。[註]よしなせへ。きついしやれさ。ト玉轡ヲ引たくるひやうしに。問ふとするを。おとまはよしなせへとたがひにうばひ合ふとたんに。中よりやぶれる。[註]ツト妙。ぬがらの三の切が残った。ト手に残るぬのはしをさし上げて。よまんとする。よまれてはチトむづかしきすじなれば。いろ／＼さま／＼もがけども。喜之助。[註]何だかおかしうかくすだけ氣がしれねへ。トわらひらき。



トよみ下す内。色青さめくわつとせきくる胸撫おるし。おとまを見つめて身アふらわしにばらくとばもなかりか。何思。[註]コレおとまさん。ひげん物やはらか。おとまはるゑを隠しながら。エおとまさん。詞なくたぐらつむいて云分。コウ是にやアおゝかた。ふんを考へている。

かひ道理の有こつたらうが。モウこういふしぎになつちやア。どふこうの譯も聞たくねエ。ガ浮世といふものは面白ひやふな。悲しひやふな。はかねへ物トへいゝながら。おれが體もこんなじやア有るめへと思つたが。けふの今で。愛相がつきた。モウ／＼ふつすり思ひ切る。コレすつぱりと手ぎれいに。船宿前でつき出しねエ。ダガ去年中たがひにはつた此片腕。ホンニあんまりのろい文句だが。蚊が喰ても字のあたりは撫さすつて辛抱する。夫に引かへ此頃はそちの腕の彫物は。とつくに消たと友達達の噂。よもやとは思つても。やぼったく改られもせず。ひよつとたき付ケられたのじやア。見くびられるもしがねエから。だんまりで。けふ迄すました。モウこうなつちや違ねエ。たとへまんどくで有にしら。こつちから突消へエ。トそばに有合ふ火鉢の中より。黒煙たつかた炎はさきみ出し。うで引まくりて焼つか

んとする。おとまはおどろき。兩手にすがりて。[註]コレ申。喜之さんそりやアあんまり短氣でござへす。こつちの心もしらねエよふに。マアとつくりと氣をしづめて。わたいがいふとを聞なせへし。[註]やかましい。短氣もせんきも發らねエでどふするもんだエ。トうつひて口おし泪。折か。○「わたしや出雲にとり残されて男冥理につきたのか。[註]ホンニモウわたい程苦勞性な者はねへ。其手紙の入譯も委しく咄せば。おめへの腹立も休るこつたけれど。こんなに又物真が行違になつちやア跡のまつり定ておまへは。わたいがにく／＼ツて成りやすめエ。[註]しれたとだア。[註]それだつて。お。[註]やかましひわい。○「[註]譯も聞ずに腹立さんす。夫はいちづじや。だまらんせ。へ松といふ字は木扁に公。きみに離てきが残る。[註]今更おめヘ何しに突だすの。引のといふとがあるもんでござへすか。

おめへばつかりを頼たのにして。くるしひ世吏せじをつかつたり。つらい苦界くがいをおくッて居やす。又彫物てうぶつのとも。ソックいゝなはるを聞きちやア尤なほとも何ともいわれやせん。一圖いちずに思ひなすつちやア腹もたつから。とつくりとマア聞なせへし。

成程しんじやうつれ衆しゆのいゝなはる通り。よんどころねエとがあつて。トいいかねて只おめへに。けふいわふか。今云ふかと。思ひ出してもどふもあんまりしがねへこつたから。ついで一日／＼とおくつて。今更云ひだし惡わるひこつたが。その彫物てうぶつはけしやした。トとまがたぶきを引つかんで。ちのめす。△此内始終兩人だんまり。轉ころり

ニ上うへへぶたれたゝかれあゑられもまれ。よごしにされて又つきだされては。何處どこで立ましようしが身は。團だんア、是もやつぱりおれがこけから發はたさだ。むせへきたね。古裡ふるさとめ。雨が降らふが鐘かねが降らふが。内の首尾しゆびをば小女こなに頼たのん

で。そんじよどこそと拵こしらへどして出てくるのを。お袋ふくろは内に居いてあんじ。おひへもたんと下タへ着て。風引カぬやふ頭巾かぶとをかぶつてゆきやれの。何ソのと。

お慈悲じひにあまへてつき上り。只夢ただゆめの間も通ひたく。是程迄このほどにのろく見られちやア。よつぽどおれもうわきなもんだ。ホンニ思ひだしやア。いつぞや新市場しんいちやうの橋の下で行違ちがつた舟の内は。新川邊しんかわべの客きやくだといふと。しかも手前てまへの處へくるそふだ。アあいつもゑり元もとはひかるやらうだが。トと少しときム。是もいつたつてつまらねエ。兎角うぐわく不孝ふかうのばちだと思おもつて。つきだされてあきらめやふ。

仕掛しかけのしうちにて。かんしやくの思入しよいればかり。兩方りやうはうつむい。○ニ上うへへつらい勤つとめもおまへを便たり。夫そレに邪見じやけんなと斗たたかり。トと座ひそくに喜之さん。マアこういふ譯わけアツ聞ねへ。たとへどんな目にあつても。わたやア一言もごせへせん。トと耳みみへくちやよせれど。一向いひやうよりむかず。

○ニ上うへへ心がらとはわしや云ながら。ひよんな苦勞くろうをするわいな。むりに喜之助きしすけが耳みみもととらへて。こんたんをさゝやく。接つぎするに先段に達たる新川藤兵衛しんかわとうべゑがあらましを面おもてしろおかしくはなし義理ぎりゆへつらいほりものヲけしたると。親とおまへえ心づくし。みんな金かねからおつたしき。わたいも大鉢おほひちくらうだよと。定さだてきまゝのこもり句有くひべし。此内こつそりのさし向むかひなれば隣となりのまはりいたこにまぎれて。作者そしやにもわからず。但ただ此こ密談みつだんは諸通子しよとうしの御すいもじにあらんか。

○へおまへばかりに苦勞くろうをさせて。わしは苦勞くろうをせぬかひナ。烏くわにうたはれ鐘かねにはせかれ。夜着よぎにもたれし思案しあん顔がほ。へつらやはかなや勤つとめの身なりや。心ないとうたがはれ。トとアレ隣となりでうたふいたこの文句ぶんぐを聞きな。みんなわたいが心いきだよ。團だんおきやアがれ。しれたもんだ。藤兵衛とうべゑが方から金を取とて。おれが名當なあたで仕舞しめ札しを下くださせ。其上そのうへであいつつきだして見せやふトへ。なんぼおれでも心持が面白おもしろくねエ。人の寶たからの十兩じうりやうで。仕舞しめたつらも何なんのたのしみ。お爲ためごかしのしよにんもいやだ。モウく何なんにもいつてくれるな。其そのかき文句ぶんぐ

もおそまきだア。○二上りへかくのたます
といわんすけれど。わしにかゝれるぬ
しじやない。とハテそう。うたぐりな
はるならば。おめへえの面ばれに。
藤兵衛さんをすつぱりとつきだすか
ら。跡でわたいをつきだすとも。どふ
ともしなせエ。そふしたら腹の立
もごせへすめへ。どふで又おめへにつ
きだされちやア。逆もあきた浮世だか
ら。生きている氣じやアごせへせん。○
二上りへちゑもきりやふもないわしゆへ
に。心つくせどあたになる。臺べら坊
などをいへ。その狂言の跡のである内。
金も命も寂滅だは。けふ有て翌ねへ命。
去年の彫物も今年の焼原。どふのかふ
のと一ツす先は闇の浮世だ。トすこしツ
文句はいへ共。先刻のみこすりにて。いあたり
わかり。段々と心の内で了簡てみれば。なるほ
どいふ氣も付。よもやといふ逢ひも出。又かわゆ
いといふ情はかみる深きなにもなれば。いふもさら
なり。されども中直りの切小口もなければ。い
ばたじやんわりとあしらつてゐる。○ハ三

味の糸さへ三筋に分る。なせにわから
ぬ主の氣は。と紙にて小よりしあんを隔める。小
ゆびをゆわゐてか臺へて。コレどこへ行ク
のだ。とチットあすこ迄。臺あすこも爰
も一寸でもやるこたアならねエ。小指
ヲいわへてすゞの香宮。むかしのこつ
た。よしにしろ。淺黄裏とは違だらふ。
トさきをくぐられて猶つたらず。そろ／＼枕もとへ
すりだし。屏風のかけへくすね置たる料理場のう
すばアもつて廊下ほけし爰と上ぐ。かきなでる
間にふつり切りて。何氣なくふとんへすはり。
とア、天窗がかゆい。ト首をばら／＼とふ
ち。サアどふぞ堪忍して是を取てくんね
エ。臺横目でじろり。とお心にやア叶ふめ
へが。折角わたいが胸はらしを。どふぞ
納てくんねせへ。臺いやだ。となせす。
臺なせでも。とそりやア近頃比興でご
せへす。臺比興でも何でもいやだから
いやだわい。ト横の方ヲ向キ眼をいらざア
うつちやつて仕舞ふ。そんなに。むきな
とばつかり。いゝなはるからわかりや

せん。臺うつちやる位のものだから。お
しげなく切て見せたか。とエ、モおめへ
もしちつくどひ。モウ是ほどあやまつた
ら。堪忍してくんなせへし。何の因果
かこんねエに。ふたれてもどふしても。
しんそこおめへが。ト喜之助が顔を泪ぐん
エ、いつそじれつてへ。見ればみる程此
顔がにくいぞヨリ。トしつかり
と見二上りへぶつもた／＼くもしかるもお
まへ。情かけれるもぬしばかり。喜ア、こ
んなに愚痴に迷つたも。此うつくしひ
しやつつらから。チヨツいめへましい。
ト引よせて夜着へはいる。○此うつくしひやつつ
とは。さすがにかわゆひ情にして。ナント有がた
き所ならずや。かくのどきあなるかたち。魂
天外にばすもむりならず。若き心にないせうの
辛苦をくみわけんとしては。ひくに引かれぬたて引
にて。おやぢの目玉ヲぬすみ。お袋のへそくりを引
だしても。初仕舞の札ヲさげさせて見た。また藤
兵衛といふじやま者もあれば。どふぞしてつき出さ
せん。ト下面にか。とヤヤ／＼いつそつめて
へ足だす。モットこつちへよん。アレ

宵立の部

いしやのむだ口きまふゝあれども。お定りなればこゝに昇す。△といつる吉はつぎきほはつして。三絃箱へ入し。廊下へつき出し。

〔二人〕 さやふなら御機嫌よふ。

〔三〕 モシおとまさんは廻してござへますかエ。

〔長〕 ム、又からゝだ。〇へエそりやおさみしふござへませふ。

〔長〕 モシとかく女は氣がつきます子。トす

ぜりふにて障子をたて。皆くかへる。〔長〕 みんな休ねへ。▲此客

工面はわるけれども。此頃は子供や迄せく噂あるゆへ。女郎おとまがやせがまんにて。ひとめんのけ

いしやつかひ。或はほろば女郎をおたいに買せ杯して。内の目をくらめる。是皆おとま壹人りのや

なり。〇かくて八幡のいりあひに。こぎよする

くざり戸の音と共に。かまびすく。神棚の十二燈は

このしめ細にかいやく。ふせだまの子供。帳場のわ

きに居らびて。耳ツこすりをすれば。口チのかゝ

る積者。はしごの下々に。しやがんで。音バツ合せ

娘分のおつたまふしなは。聲と極とを。内中に引

ずるも。早よひだまりの床納て。五ツの拍子木

かち。〔長〕 五郎酒はねエか。おとまよしねへ

〔長〕 ナゼ。ひさしひもんだ。〔毒〕 だといふ

のに。〔長〕 ばかアいやナ。好な酒をばやめ

ろじやないが。茶碗酒をばやめさんせ

といふたこがあらア。夫だから俺ア

ぐい呑はしねへ。てめへこそ時と癪癪

で青るじやアねエか。〔長〕 エ、きついしや

れさ。〔長〕 まだ齒もはゑねエ。〔長〕 よしね

へ。いゝきせん。〔長〕 ナンダあんまりし

かるなエ。此頃は久しくさがらねへは。

〔長〕 したとサ。誰さがりを承知するも

んか。コレよくこんちう糖研へ行たの。

〔長〕 ウンニヤしらねへ。〔長〕 ナニしらねエと

が有んもんか。隠はん。よくしつ

ているヨ。トこそぐり。〔長〕 ア、あやまつた

／＼。ム、ありやアなんだア。エ、なに

よ。友達のつき合で。せふとなしに上

嶋へ行たのだ。だがかな棒ひいた。〔長〕

誰でもサ。ほんにむだアのけて。此頃

も子供屋のおばさんがしみて。異見

したよ。夫だつて又。人の異見をこは

がる位なら。こんなにはだかに迫なつ

て。是迄おめを呼とげるとはなら

ねへはな。どふするもんか。かふなつ

ちやア。わたいも意地づぐだから。た

とへくらげへされるツても。離れやア

しねエ。いつぞやも何やかや。あんま

り考たらば。いづそやも何やかや。なん

から。用事を付て引込で居やした。そ

ふするとモウ爰の内を始。なんのかの

とやかましく云ふし。モウ／＼何ソの

も思はねへ。なせこんなにはかねエ

やら。何角に付ても此頃は。一日も早

く行たくつてならねへ。まだも便にな

るのはお巻さん斗りだアな。ホンニモウ

あの子は兄弟分とは云ながら。いつそ

情があるよ。トしんのはなし。〔長〕 は始終

付ながら。愚痴なとイいやな。てめへら

しくもねへ。どふするもんだ。よしん

ば又るこちなとをぬかすがさいご。や

てへばねをたゝませて。ばつた。こ

うろぎの寐處にして。女郎の有ツた古

跡には。べん／＼草にかやつり艸。角

力取草。女郎花の花の盛を見せてやる

ベエ。[図]アレサ大きな聲をしなさんな。[ト]かられて少シ[図]何をいふも借だらけだか小聲になり。[ト]初らねへ。そりやアそふと。[此間]頼んだとをどししてくれる。いつか中の櫛としのぎも。色と面工して見たが。てつこにおいねエから。漸と利上でくゝり付た。ア、なんにしろ今年は初中ひつてんだから。さつぱり出入はできねへ。[図]其事もわたいが吞込で居るヨ。それについてはなしがあつたつけ。おめへもしつて。ソレ新川の客人の。[図]だれ。[ト]ソレ藤印さ。[図]ム、あいつがどふした。[ト]此ごろ内度ノくるからいろノとつうくつしてノ。ア耳をだしな。[ト]さふばかり。[ト]國ム、く。[ト]いふかたちだから漸と五兩トソシテ外ニ壹兩貳分もらつたが。此頃は金八どんが居ねへから。おめへのくるのを待いたヨ。是でどふぞ借方をちつとづゝもなすやふしねへ。そふしねへきやア

此すへおめへの所へ行くつても猶つまらねへじやアねエか。[図]ム、そいつア。面黒い。そいつが有りヤアよつ程いゝ。實にモウ此恩はわすれねへ。[ト]恩も何もいらねへ。こりやアする筈のこつた物ヲ。しかしおめへ早吞込だから氣になるヨ。夫を又むだ遣ひしなはん。命から二番目と云ふ金だによ。[図]べらばういふな。うはきらしい。コウトあいつが所へ是と。ム、こふだから。此たらず前は。又こつちに。さんだんがあらア。いゝ。へて是からト。あげさげヲして皮羽織を引ださにやアならねへ。[図]おめへ有んじやアねへか。[図]アリヤアふだん着だ。[ト]そしてまた鳥居丁から來る客人にも。チットばかりあてゝおいたが。コリヤアどふも初仕舞の客だから。ちつとしにくひ。[図]でへぶいゝ鳥がかつたナ。何か喜之とやら。畜生めエ金持にやア何がなる。[ト]貧乏人に

やア何がなるだ。ホシおめへかゝさんの病氣は此頃はどふだへ。[図]まだよいノ。だア。わりの時にお袋の病氣だから。一チへ鹽梅しきがわりの。[ト]おまんまは能あがんはるかエ。[図]ム、ちつとづゝ喰るそふだ。[ト]そふだじやアねへ。おめへもちつと氣をつけなせへ。内には誰を付ておきなはる。[図]ム、やとひばゝアをしてもおんなじこつたから。丁場へ出た跡にやア。瘡をかいける野郎共や。建前からおツこちた居候や。何角にあてがつて置から。どふでろくなとはしねへのさ。[ト]夫々じやアさつぱり氣が付めへのよ。[図]ナニ氣がつくもんか。こつばげんくわをしちやア酒を喰ふとばツかり考へてらア。[ト]それについても。早くおめへの所へ行てへヨ。こんな時が女房の役だのに何をいつても金にかはれた身の上だから。しがくの仕様もねへ。正直わたりやア

實のかゝさんのわづらふよりは。氣になつてならねえ。あつちこつちを思つて見ても。おめへもチツトおとなしくなんなはらねへきやアすまねへヨ。〔長ム、おれも禁酒でもしやふ。〕ア、それいへばそんな堅ひとを云なはる。何も夫程にせずともいはな。〔長てめへがそんなにあんじて哭るに。おらアよつ程不孝もんだ。けふ此頃はおれが氣でもつまらねへやふだ。ア、いつそ。早く死がまだらふ。とうつむひて大。〕とこうしていろんなを思ふせい。か。常不斷おめへの所へ行た夢を見るヨ。ト是もふしばらと。〔長ア、ふさいだ。〕ふさぎの蟲や赤蛙だ。おれもモウお袋がせふちだから。早く早達せて見てへ。〔と。んをき。〕そふしたら。いろんな人が来て。喧嘩ばかり有だらふの。〔長何ソのき。〕ついでが有もんか。喧嘩をこはがつて。おいらががゝアになれるもんか。肩

間へ三寸とびぐちをぶつ込んだの。出刃庖丁で。どてつ腹をえぐるといふとは。馴ッこになつちやア屁とも思はねへ。ア、モウねよふ。〔と。ホソに頭になるのも附合のうるせへもんだ。〕いかねへこつたが。おめへ日なしの口はどふかたづけた。〔長だまつて。〕顔のぞい。ヤアおめへねなはるか。起なせへし。トせな上る。〔長よせエ。〕ゆんべ親分が所で。子方のやつらが中直りをしたから。よつびてへねねえ。〔といやだ。〕情のねへ。まだ咄が有んから。ねかしやアしねへ。トゆすぶれどもしやアとして。鼻ヲつまんだ。りわきの下ヲこそぐたり。いろくして横にねかきぬじや。〔長コレおがまア。〕ちつとねかしてくれ。今夜はなをさア。〔と直す。〕直す。工面があるか。又こつちかぶりだらう。〔長しれたこつた。〕と夫だから。なをねかさねへ。〔長そんならどふとも勝手にしろ。トうしろをむいて肴中食。ちわ。〕〔朝頭ハイ。をする間も早四ツの鐘。〕

お迎ひでござります。

朝直の部
宵泊の部

追而後編ニ奉入御

覽候。趣向は出来あれども。丁數余れるをいとひこゝに不着。

作者曰

予おとまが出所をかんがみるに。定て本所邊りの片はづれに。御目印青紙の。と刷毛書の水油有りの障子ヲ立たる。九尺店のろじ口。本道外科と割て書たる醫者の表札。さんげの。梵典と共に。雨晒となり。屠家葺の棟割に蛇の這出る流し元。大やさん鐵棒ヲ引きすり。火の用心ト觸れば。隣の饅賣向ふの神道者に雇はれ。はつち坊主の木魚。花賣の火打簀と朝飯を爭ひ。神儒佛もみ込の大長屋に住む親仁といえるは。肩すくに

石場 辰巳婦言大尾
妓談

その日を送り。夜はよもすがら。おでん白菊鹽梅よしも。内の工面はあんばいわるく。母親の賃仕亻も。お花荒神松のりやの間ダを見合せ。いとけなき時はめけたらたん切大ころばしを口ナにはふばり。南京小紋ニ鳴海絞りのつぎ／＼。油揚げのどきを引ッばり。うどんやの汁つぎをもつて。醬油を六文。壹文の糖袋。ふすま磨きの小むすめなりしも。十五といへる春の頃。親仁が中風の爲に。終には金にか

へられ。抑成長てひらぶとの半ゑり。縮緬の二布錦／＼たるといへども。心は生來をうしなはず。先に著したる新川の伴頭。鳥居町の息子株を廢して。かゝる貧困の俠客に實青を盡す。是なるか。非なるか。嗚呼是非もねへ。實や。色は思案の外といへど。迷ふといふも。悟るといふも。色道の識不識に可依歟。世界の通君子。ソレさつしておみなし。

跋

式亭主人戯作
の力任に古石
新石を穿。是を
新し手に持て。土
題となす。僅石
なごの玉。ふせ
たりと雖。礫
にうてる座鋪も
なく。將投らる
ゝ床だに非ず。
されば間夫に盡
せる實情には。
望夫石をも輕石
と安んじ。コン

コミリキ「マカリキの古へならで。方言能通じ合へるは。鸚鵡石の潛るかと思ふ。眞の咄の効じては。夜啼の

式亭主人戯作の力任に古石新石を穿。
是を新し手に持て土題となす。僅石
なごの玉。ふせたりと雖。礫にうてる座鋪も
なく。將投らるゝ床だに非ず。されば間夫に盡
せる實情には。望夫石をも輕石と安んじ。コン
ミリキ「マカリキの古へならで。方言能通じ合へるは。鸚鵡石の潛るかと思ふ。眞の咄の効じては。夜啼の

いめづら
 石も珍しからず。
 髪かみの飾かざりの風流
 なるは。赤松仙
 が羊ひつじの手際てぎはか。
 何にもせよ。未
 一部の碎くづも不知いまだ。
 狼いちぶりに玄能げんのうを打
 振り。唯野暮たひやはに
 もてるといふ而
 已こじうをもて。五十
 五貫目ごごはなめう。内一卷
 中ちう腹はらにしるす
 更としツかり。
 純々亭主人
 まつりのわたる
 祭和樽述しゆ

能う通つう令れい。鰯いわし石いしの焚い火くわと延のふ真
 解かいの風流ふうりうも。赤松仙せきそうせんの羊ひつじの
 手際てぎはか。何にもせよ。未
 一部の碎くづも不知いまだ。
 狼いちぶりに玄能げんのうを打
 振り。唯野暮たひやはに
 もてるといふ而
 已こじうをもて。五十
 五貫目ごごはなめう。内一卷
 中ちう腹はらにしるす
 更としツかり。
 純々亭主人
 まつりのわたる
 祭和樽述しゆ

羽根なくして百増の猪牙。魂と共に虚空に飛び、手無して癡夫。克傾城をあやなすとは。是錢術の徳ならんか。這箇先生。ぶら提灯の光を以てゆふしけふしの目牘を探り。妄言の趣向をかきながら道。おもひたつみ。辰巳の古石を見

羽根なくして百増の猪牙。魂と共に虚空に飛び、手無して癡夫。克傾城をあやなすとは。是錢術の徳ならんか。這箇先生。ぶら提灯の光を以てゆふしけふしの目牘を探り。妄言の趣向をかきながら道。おもひたつみ。辰巳の古石を見

通す。其洒落たる夏。新地の端の棒枕に等しく。予も又此書の一座に加り。チヨビとおんぶの跋文を認める。即三馬子へ贈り申す。

式亭門人
 樂山人馬笑

予等々々又書此一在
 おんぶ跋文と認る即三馬子へ贈り申す

式亭門人

樂山人馬笑



后已婦言
 通俗通

近刻小本二冊
 睦月の月と對白なるふ女房乃手より去而角玉と腰の硯ある一寸は本人の筆にてお市のやうな流石のやうなわさ

傾城買噓其情中本
 主月樓乃泥とんかち客とゆふまきのまの格う秋乃和く四まきとゆふ